



芭蕉翁桃青居士



續下野

江州粟津 義仲寺

蕉翁杉風画



右蕉翁像者
古人杉風氏
所寫也今應
某子需東都
岷雪再摸之

芭蕉翁終焉記

之形屋のまゝ暮るが〜の重くおふて溜りて心
 う〜息不冷〜の納涼の地あることい濕音を
 うもておも袖〜れを好むつけ〜を秋を〜め
 ぶ〜いを流る猶とつ〜むを〜りな〜と〜か〜も
 あ〜と〜也雪の枯尾花と無常閑閑の折〜を訪
 ら〜と〜便〜と〜出〜帰〜と〜年〜就中老衰を〜と
 歎あ〜と抑此翁孤獨貧窮あり〜徳業は〜ある
 り〜と〜量〜を〜中〜二子〜餘人の門葉を〜を〜ひ〜し〜

合候も多固く縁より不可思議いふも動破り
天和三年の冬深川の草薙急火はかきまき潮は
初より苦きうらまを憐れうらま生のひんそは持玉の
鏡のまゝあやめぬまはれぬ火宅の憂を悟り世
所任の心を發し其の年夏の雨は甲斐の柳
をりて富士の宮のまつまをりぬはれぬ
三更月下入無事とらひん昔の跡は立陣おん
うねり人々わくく縁原の舊村は夜を越ひ志は
しも心ゆくも縁はもとて一ふの巻巻を植たり

雨中吟とせ成り分るる益は雨をすおれと健
まはは堪雨の友志あくるひととの流るる巻巻
と候もよまの巻巻は此圖典見古大巖和書と
中々易よくりぬかりは家よありてうらひ候るよ
成時翁の本卦の危うんんと年月時日を古書よ
合せし巻考せし巻よ華と云卦はあくるは六
と水の原の風よ吹きぬよ巻巻と云よるの巻
志あくる巻よ命つ巻よからりし巻よある
はあよたへる巻よあはれと巻よ生れハ潜

高き山に雲霞の巻くは
庭を歩むは花の香も
清のまじりて川流の
たれもかくも感むま
林あり塔あり花の
赤の葉も捨つて
清のまじりて川流の
たれもかくも感むま
林あり塔あり花の
赤の葉も捨つて

まじりて川流の
たれもかくも感むま
林あり塔あり花の
赤の葉も捨つて
清のまじりて川流の
たれもかくも感むま
林あり塔あり花の
赤の葉も捨つて

後菘
記あり

後菘
記あり

拙（ふ）り年あり元來混本寺佛頂和尚と嗣法——
むとらと并様の法門とをき一氣鉄鑄生ひよひたるを
あまとも先分く川河くまふま句あのおひるまも
自然も山家集の骨髄とぬる水も有るやとて
了我此道の杜子美ことまてとやして笑文人の厚く
喫茶の會盟は抜くる宗鑑の海も教のむとてこ
あま自由舞放狂神世卷とくは川もせりも現力之れ
為實のちあま風雅の妙花は白ひ月はかたや柳は流ま
言らむむるふ源廣の石のお流流流流のぬほの杖と

引たりありあくこさこつは能因本宮路も兼好二元と西行
高僧も亦連戦路の縁も宗祇宗長白川は為載の
そあ菴いつきもくかあまうそ色蕉翁まつてる海りし
んえいさやくとこ我もまきりし傍の空もあまのそりしや
真のそそ^{真のそそ}あり十餘年うら杖と雲と霞とふさふ十日とを
止まる所もあまた我系獨の巾と遠祖神のまふし路も
あまもと語らふくはつ々娘控の心や置火燧そは意法
和尙の孫の母もあまのこひは病く竹枕ゆ免の中あもあま
ん系系とくそあせくまひし思ひ合もそ侍もなり遊子ら

一生は採子に生じてとてゆゆしき生涯とて終へしを四
つに結ひつる深川の流と又ち出ふとて嘗や筆を舞子
先を傳へも巨なふあきちありし心は流にまじりてとれり
かゝる後しとてわさひ傳授の古郷に居るまゝ人二〇日の
記あり
なまそありの果素とてうひのあふん人よこせを女と
傳の國なる人よま移りてなまそを流に傳授ありて思ひ
ちあふまそを神のまゝ兜生へし九月廿日播磨所の曲原
子とていそり流にまじりてとれり人よこせを女と
傳の國なる人よま移りてなまそを流に傳授ありて思ひ

採子よありの者ありしタヒラ 菌の塊積ツカエよさらる也と覺しとて流
けあれぬの素とてまのまの流にまじりて長月あのおらり床ま
しき世に流にまじりて物よ力もあふん足少ぬまじりて
とて集る人よこの中ありてまのまの流にまじりて流にま
正善大津より木節しあ大津平田の李由つま流にまじりて
惟然とて流にまじりて流にまじりて流にまじりて流にま
まのまの流にまじりて流にまじりて流にまじりて流にま
詞よつる流にまじりて流にまじりて流にまじりて流にま
の耳よ入るも心弱まゆ免のまのまの流にまじりて流にま

挽もあて着ハ枯壁残のけし家

あし枯壁を也家着んせよとやさきく是ハ妄執
まろく風鏡の上ハ死ハ身の逆と切ハ思ふと扱おれハ日の
おのひもや各もあく是く賀會祈禱の句

届つあやうも水く神集め 木節

風の空ハあそと也鶉の聲 本来

是く後ハ舟の林也いれさる 惟然

神古くやくそま引ん佐太の事 正秀

神の富吉彰く力や雲のうせ 之通

居よくいさくつまわり響の歌 伽香

起さくありもくね 湯集哉 支考

あはや使よつさく床舞き 吞舟

泣くも鶉のさありや法さぬひ 文艸

のよあーてんあそ歌くまおの菊 乙州

是く挽生あのみ納先之本節も業を死すくかち斬りすまき
いふも実之人くくろく活きと触のハ坐臥のさまけや
ある者吞舟と舎羅之是ハ之道く笑くして智あく切
志とくこ(家)めて(彼)所人あく(代)あははそめて介抱の

彼と一語も交わらぬも縁もあきて師つづきまづ。と云悦ひ
あつても今ふらふのなげけもあれ心より羨まことなりぬ
各うらうらひは麻の心垢つきの糸をねらぐよ記まぬは悦び
おの衣の縁とさかして錦繍のあてと記とより調へぬそ門
葉の者たう面目く九日十日は清よを家しある其角
和名の府波の輪と云つるをへ集る役をしておよびつて
りまはち河川と思ひ出するよと悦ぶと悦ぶぬと悦ぶてむ
うひあつて悦ぶと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
の満心より悦ぶと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ

なぐ菊の刃端覺來あとはるるるるるるるるるるるるるるる
とちち狗さああといふあつては病床よりうひあつて悦ぶぬ
ちちち悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
西の住吉の神の引きあふあやと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
祈つる事ちかひあつては悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
とちち悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
ありあつては悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
心や悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ
乃ちちち悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬと悦ぶぬ

吹井をりし鶴を招く時ふ哉 晋子

と祈撫ふく慰めやあや先ねむ推の末もありと流し
幻住菴ハ浮世に達し木曾殿と塚を築へてや者し
ふむむ毎年のころりやふ事あるそ女ささうあの内月
の比し形の家はあうりやああ句世のあるとお表
と思へるとはは能張の事もありとあさきゆり流
あやなふ葉をあらわむりあの若貴麻もやうて原ま
うはくも海菜の下のささうふ 大州
病中のあやうりささるやみさ流 七葉

引揚ぐやんしおきまふ笑ひ夢 惟統
去うらむく次の方へ出る事あり 交考
おひまおあかもあさうきこのり 正秀
園よりて葉飯多きるおあけ 本節
皆子くみのむしきく鳴おき 乙あ
十二日の申の刻よりりよ死顔るりく睡ねると語くそ
物うらけおむおきよ長櫃はくく高人の用意のやうに
こしらへ川糸よりく宗を来乙お大州お考惟統正秀
本節春亦寿友子次節流 節ともよ十人おらるる本神

宮本又孫麻ノ我あまの事ノ我あまとなりあま孫
とつふたふと孫麻名をよむとて孫麻はうらの歌毎に記す
つものまをたふとて孫麻の事と記すの事と記す
孫麻の事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
うまのつもの梅をよむとて孫麻の事と記すの事と記す
あまの事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
人よ一おもひひそがまの月をよむとて孫麻の事と記す
ぬ門の思ひひそがまの月をよむとて孫麻の事と記す
かゝる事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
孫麻の事と記すの事と記すの事と記すの事と記す

洋指所の連衣披官後志まも孫麻の信と慕つる事と記す
さる事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
孫麻の事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
の事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
さる事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
とて孫麻の事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
植ゑる事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
あまの事と記すの事と記すの事と記すの事と記す
よむ事と記すの事と記すの事と記すの事と記す

為遣骨と御上の有は照るは夕やをそのあぬ翁也
今七日の程こそりそくまそよ遊吾の無り晋子あ
つふい布もやりゆ人このまげ表と合哉くそ悪ふ
終の尊の記を掛し御家之程もたるあふ風のつこ
身翁と志のしん業ハ是とそを回向の便とて

於粟津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七甲戌歳十月十二日

明治十八年初冬 日 桂花

書寫

吉綱各ちそ

嘯 やそ義仲寺のさ乍昔ま西京入芥なる花ら百ら可海
そ梶の尾そ花も花あ西つ京り芥 枯尾花 西京 芥花
此百道の可む可や可を可し可の可 寂 繁 百可
紫物の春る春そ春又春名春月春の春柳春う春那春
ん碩そ水あ水ら水そ水く水も水ら水そ水銀水河水 碩水
蝶大多坂の瀬そ有く有む有ら有く有一有境有の有あ有 大坂 瀬有
ゆ尾あ尾を尾あ尾ら尾お尾ら尾繁尾あ尾く尾一尾り尾 尾尾 けいん
雲雨の雨け雨い雨と雨は雨て雨あ雨ら雨り雨く雨秋雨 月 雨雨
く三わ河ら河く河く河を河流河す河も河壳河の河手河う河く河心河
傳三り河も河く河く河そ河る河や河ら河あ河る河弟河 小 三河 蓬宇
洋

月よりともなきをさあらしめぬの 藤 十湖
 御ちちやともなきをさあらしめぬの 駿河 乙彦
 まるややらさきよを雷の朝 湖 桂女
 今日おひよその長巻を初めぬ 相模 松頂
 茂来く棹も休むに今日月 武蔵 青坡
 梅牡丹くめ枯ぬるをさあらしめぬ 八ヶ岳 長妙
 君の代の宴よも橋やその川 東京 等哉
 抱きく火桶汚さん初あらしめぬ 永楫
 まね枯の雪とあらしめぬ 素水
 葉掃除の一本と清く松の葉を 尋香
 まる葉の落るをさあらしめぬ 幹旌

夕かけをのこしめ暗ぬ初あらしめぬ 鶯笠
 除くぬ月もるの名よ呼しめさあらしめぬ 猪知
 炭のまや横一里んりよ乃花 古豈
 暮よ乃よ深くあらしめ初めぬ 薄島
 けしきく水も先ありを初めぬ 餅石
 ささくつきく雪もさあらしめぬ 謝徳
 まる心先細くさあらしめぬ 月表
 音くつき雪成りしめさあらしめぬ 盛岳 沙山
 心を暖くさあらしめぬ 因幡 大崎
 咲も初めぬのこしめさあらしめぬ 東京 宇山
 咲も初めぬのこしめさあらしめぬ 梅年

葦の静も似花の数
 ちらちらと霞の移のかし
 風かきつはとありぬ湖の色
 まくほとの志くれとまりぬ夕まき色
 雪と飛斗あり大相曳
 今もそぬくもいささな枯尾花
 早稲の香や踏も潮まつをそあ
 握舟の届ぬ握と迹しり折
 何の香もあくる月おの枯尾花
 白雲の秋とありさう山から
 天の川をたるとよくゆより
 吳仙
 伯志
 花祐
 田子
 玉守
 桂鳥
 百丈
 素亭
 野中氏
 潮堂
 平基

雨もまぬよりの交。田うくう那
 水の音雨もよけり松うし申
 江のそとく変くまき心言ふ
 又雪のうけても遠く月一板
 夕くしの光も眠るかふきく申
 ちあつきのまき河まうてまき子花
 百ふも蝶もあまの河せし
 あやしく福もたし人まきり
 降ふまつゆふの引く春の色
 日と向くるの海もくま田
 笋 やまけしと照もかへし
 紀伊 心 我
 上総 宗 石
 東京 青 宜
 花朝女
 豊海
 葛谷
 玄鷺
 池舟
 千畝
 素石
 太年

花のりーはらうみ仲あらら 芝 桂 宜
 晴く後雨をふむや芒らうり 池上 桂 彌
 紫穂の香や隣はみよ河 流波雲 赤坂 伯 窟
 志らくらりー衣黒木の垣 牛 竹 司
 雪や何を待てるいそり 賣 鳳 弁
 揚屋火お祭の橋の阿くくまで 薬地 葉 山
 名月のあふむいりー橋の人 梅 圃
 夢あふる人うけ始ー龍田山 桂 史
 春崎の杉も墨絵や局 魂 涛 泉
 白芥子の清く雪まらうさまりー 梅 子
 花の鳥彼を梅くさあかりー 茶 丘

誓とりよ名ふ八尾くは世代 女 桂 裡
 手色子縁は流人春阿らー 雅 長
 破村の梅干くさ記月お 鶴 翁
 初まきんく朝風呂の支夜う南 拙 我
 菅刈の振目とくは川ふ馬 萩 月
 口ましく人を破屋を 新 酒々系 竹 子
 穂の戸と旁のくくを撮是は 根岸 東 枝
 のくく葉されともあふ花きあー 花 柱 女
 山里を流あふ初るや住くくろ 二世 桂 丸
 日も初へ襟を涼く心おくかへる 飯田町 柏 葉
 少身く女小くくく小おきぬく 桂 舟

さめくの種類く空や多変る 本所 桂志
 月のかけ氷るあまを必くせに 紫芳
 笛子耳とえて盡るを休めり 千草
 松茸やそらみり乃 漏りぬ 壽曙
 蓮の葉の飛そく神くくりくハ 松月
 教くそん松の葉もほきハ 意山
 雲あらし 歪あられ 切みりく 茶樂
 雪 越のるを雪やま川 櫻 本亭 雪花
 心せん 掌のゆるむ 目とまよある 和泉下 札腔改 好生
 松のあるあまの 新の雪白く 壱下 北窓
 白秋のそくくを忍びハ 家源一 濱下 桂之

麻と伸 草も のひさや 夏 多 京橋 櫻盛
 秋の 蝶 家の 音も 追つせり 霞光
 三の 朝 大車 ふまのう 一ツの 那 英雅
 空 塚 や 朽木も 白く 那 其雪
 海 直く あらま くらに 春の こせ 万下 花山
 雪うき 山まほの かま 成より 茅下 桂笠
 後 河まふい 富士 せん 初 櫻 左内下 東変
 舟の 音く 音ハ 晴り 朝 馬 西川岸 山 樵
 桑の 踏と 交音 しく 里まき 丸 玉川 調子女
 了くも せん 里まき やまに 出代る 叔 向島 紫文
 知 悉 葉ささき かりひの 火桶 下 京橋 我隣

転 花く 春を古きぬ流 一の南 神田 孤峰
 月 待く 人來をのりの納涼 一車 松 齡
 笑 之ぬ 木や 秋風も あり 一石と 塊丁 巨洋
 苗 涼 一 丸き ころろの 並 一交 浅草 秋江
 千 あり 一かき きの 春を 干 浮 ます 伊七丁 三花
 松 ころろ 柳の けと 涼 一 麦 魚カシ 無 一
 鶴の 葉よ あとを きく じ 飾 菜 蛸売丁 湖月
 立 され 月 の 雲 や 友 柳 室町 心柳
 や あり 一 蝶 涼く 立 ぼく ぶ 梅花女
 牡 塲 小 踏 系 良 菜の 陰 八 ころろ 五 笑
 ころ ころろ の 春を 春よ 立 以 落 産 成 紀

え 日 ころろ の 種 を まく 日心 武ハシ 支 英
 起り 炭 夫 秋の 山 浅 ぶ ぶ ね 超々 桂 寿
 海 くる くる 世を 海 ます 山 さまの 林 見玉 喜 乐
 つ 道 さまを 虫も あり 一と や 中 八 涼 玉川 晋 士
 櫻 も 一 扱 蘇 ころろ 一 明 馬 東京 一
 冬 ふうり 月 の 離 波 や 芦 の 夢 里 得
 虫 の 音 一 扱 や ころろ 一 月 一 扱 和 行
 根 子 ころろ の 春 夫 の 細 一 や 枯 尾 花 植 花

拾 香

色く世をたふさし中よ 祖の徳を
 忘の事よ志何つうし人この世白
 の実志世をたふさし中よ 祖の徳を
 色く世をたふさし

高の松探らん 横のかき尾星
 たる指し多世をも入る世に
 流るる世 殊よ久よそよ本 葉は
 忍入る一本を何しと 初しと
 傘を升々よせんを何しと
 細さの奥もひけて 枯尾花
 潤いの世よ不易ありしと
 むさあや霜まつるはあふさる

甘多言
 七世 今 我
 梓園
 嵐牛
 葉字
 見外
 阿牛舎
 甘志
 葉露
 石叟
 月の本
 為山
 小葉庵
 春湖
 握 多 葉

冬の日を長く何ふく 画像小
 本らりの松よまき日影小
 朝日上げく白小 指や雪の世
 葉山を忍るしと 何の葉山よ
 この世もこそふとあふ 枯尾花
 稲扱くとつと小葉の世あふ
 雫の葉よふても忍るしと 旅の愛
 底ぬげく 清あのかや秋のく世
 忍るしと 忍るしと 何の世あふ
 裁く世あふ 忍るしと 何の世あふ
 人新し 何の世あふ 忍るしと

五窓楼
 千分
 雨樹園
 菊雄
 関山
 大香向
 かり穂
 禾 曉
 古今庵
 葉老
 芙蓉庵
 富水
 探花園
 桂左
 融と慶
 卜早
 庭庵
 林甫
 孤竹堂
 三千宇
 芦明庵
 五 休

夏よりんく蓮の林 さくらんりり
 けみりり さくらんりり こころさくらんりり
 名ありき音しり さくらんりり 夕巴りり
 木紫火や淵の味 さくらんりり さくらんりり
 枯しきさくらんりり さくらんりり
 草のぬり さくらんりり 神のさくらんりり

以上

ニ不軒 完 鴉
鳴立庵 寿 道
同 佳 宇女
施無畏 甘 海
萍青居 我 昂
金精館 堀 田氏

終焉記再刻

枯野の夢の詠を兼入詞忌言ルカケンヨウ志をりあくるあひそ
 既に翁の二る逢はあつあもや西村ぬさねを此乃
 せりく人をむこらあさあおくしを道福乃心
 ありきあしあうたれいそねれのねまひ中の子向と
 何をさうあしあまもる子宝晋當り草しり終焉記とよ
 そのそ板もそりたさるよりあめぬむハことを再刻と
 そおろ忠殊務あ。さぬを更し世に廣く傳へんとそ
 終のまにかさるりかあのあまの道まひりし人よのそ

素人の業もあはれき道の梨の味か
心安くあはれき道の梨の味か
〜もその後をうけし様子のあせ教頭を義地ある
其前より備へりあるを親しき山さち配りて晋子あり
のめく〜も回向の便りあり〜

幸島 桂花



明治十九年夏秋刻成

明治十九年八月廿四日御届
同 年九月十日出板

日本橋區萬町九番地

東京府平民

翻刻兼出版人 石川千代

同 區同町同番地

發賣所 春雲堂

